

「発達心理学研究」における 査読のあり方

インパクト中心主義について改めて考える

企画：日本発達心理学会第32回大会委員会

ファシリテーター・話題提供者：伊藤 大幸（中部大学現代教育学部）

ファシリテーター：仲 真紀子（立命館大学総合心理学部）

ファシリテーター：杉村 伸一郎（広島大学大学院人間社会科学研究科）

話題提供者：氏家 達夫（放送大学愛知学習センター）

話題提供者：高橋 登（大阪教育大学教育学部）

話題提供者：岩立 志津夫（日本女子大学人間社会学部）

企画主旨

- ◆ 2008年に導入されたインパクト中心主義は「発達心理学研究」の大きな特色の一つ
 - 論文の欠点よりもインパクトを積極的に評価
 - 修正再審査の廃止
- ◆ 近年生じている問題
 - 採択率の低下
 - 投稿数の減少
 - 科学研究の再現性に関する問題

流れ

- ◆ 話題提供（60～70分程度）
 - 氏家 達夫 インパクト中心主義の導入経過とその背景
 - 高橋 登 「発達心理学研究」の行方—2017年レポートで考えたこと—
 - 岩立 志津夫 2008年改革の背景と経緯、廃案となった「編集規則（岩立私案）」
 - 伊藤 大幸 現行の審査システムに対する会員の評価と再現性問題への対応の必要性
- ◆ ディスカッション（50～60分程度）

「発達心理学研究」における査読のあり方

インパクト中心主義について改めて考える

インパクト中心主義の導入経過とその背景
氏家達夫
(放送大学)

ことの起こり

- 当時の理事会の依頼を受け、会員へのサービス向上のための方策を考える委員会が作られ、機関誌の問題が取り上げられた
- 問題になったのは、投稿数が少ないこと
- その理由として修正再審査が繰り返されていたことの弊害が想定された
 - 発心研は修正意見が多く時間がかかる
 - 修正意見に従って修正するとだれの論文かわからなくなってしまう
 - 実際、形式面での修正意見が少なくなき、「角を矯めて牛を殺す」ような事態も散見された

解決策として考えられたこと

- 審査結果をできるだけ早く出せるような審査の仕組みにできないか
- 修正再審査という審査結果をなくし、可否を決めるようにしよう
 - 編集委員の権限強化ー掲載したい、あるいはできそうな論文（掲載にもっていきそうな論文）かどうかを判断
 - 掲載可の要件として着想や方法のおもしろさ、結果の有用性などをより強く意識しよう
 - 否になる要素がない手堅い論文も掲載可に

2008年のメッセージ

- 2008年第19巻の第1号の巻頭に、「発達心理学研究の審査を迅速化し、無欠点主義からインパクト中心主義へと変わります」という編集委員長（氏家）のメッセージを掲載した
- 当初準備した原稿に、インパクト中心主義ということばは使われていなかった
 - 理事会から最初に紹介した委員会のメンバーからか記憶は定かではないが、私の原稿にインパクトがないので、インパクトのあることばを使ってはどうかという意見にしたがって加えたことば

トップダウンの改革の功罪

- いいだしっぺの氏家が、理事会から編集委員会に送り込まれ（私の目線では乗り込み）、審査方式を“力業”で変えていった
- もちろん異論も－編集委員の決め方も理事会主導にすることで“抑え込んだ”
- 理事会の命を受け、権限を与えられて実施した改革が健全だとは当時思っていなかったし、今も思っていない
- 実際、さまざまな弊害が生まれた

編集委員会の独立性

- 編集委員会は、本来、理事会から独立であった方がよい
- 私の1回目の編集委員長だった時、理事会で常任理事から編集結果についての意見が出されることがあった－編集委員長として、その意見に抵抗
- 理事会に案を出した時には、トップダウン改革はこれっきりにするよう求めた
 - 以降は編集委員会の自律的な改善と改革に任せるようにと

編集委員会の自律的改革を望みます

- インパクト中心主義は金科玉条ではない
- 常に見直しや改善、さらに必要があれば改革を
- 改革が必要な時には、編集委員会のイニシアティブで－少なくとも現代表理事としては、編集委員会のイニシアティブを歓迎するし、最大限に支援したい

「発達心理学研究」の行方 —2017年レポートで考えたこと—

2021年3月29日
18:30 ~ 20:30

高橋 登 (大阪教育大学)

レポート作成の背景と目的

- 2016年9月25日に開催された第7回社員総会において、編集委員会から問題提起されたことなどについて対応を検討することを目的として、編集ワーキンググループが設置された。
- 理事会からの委嘱を受けて高橋も参加した。
- 「発達心理学研究」誌の現状と課題を明らかにした上で、対応策を検討することがワーキンググループに課せられた課題。

新システムが導入されて10年が経過したことを踏まえ、その目的がどこまで達成されたのか、また、いまだ十分に達成されていないとすればその理由は何か、明らかにすることが目的。

検証に当たっては、新旧両システムにおける審査状況の比較、および新システム導入後の歴代編集委員長からの聞き取りを行った。

論文の投稿は増えたか

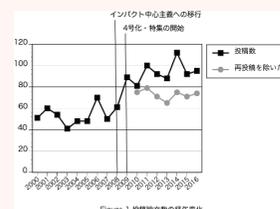


Figure 1 投稿論文数の経年変化

- 掲載論文についてみると、旧システム下の11-18巻（2000年-2007年刊行）では1号あたり7.3本の掲載であったものが、21-27巻（2010-2016年刊行）では1号あたり9.5本（含特集論文）、7.4本（除特集論文）と、4号化によって1号あたりの掲載論文数は減っていないだけでなく、特集論文を入れればむしろ増えている。
- 2017年についてみると、28巻の掲載論文は5本（第1号）、5本（第2号）、4本（第2号）と大きく数を減らしており、掲載論文数についても大幅に減少している。

審査は早くなったか

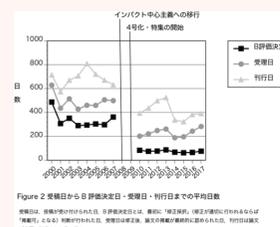


Figure 2 受理日から日評議決定日・受理日・刊行日までの平均日数

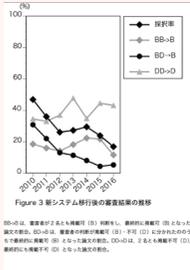
受理日：掲載が決定された日、日評議決定日：最終的に「採否」が決定された日、刊行日：掲載された日
掲載日：掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日、掲載された日

- 2000年-2007年までは、受稿からB評価の決定まで平均で**336.9日**、そこから受理まで154.6日、そこからさらに実際の刊行まで195.6日かかっていた。
- 2010年-2016年は、それぞれ**72.3日**、154.2日、190.7日

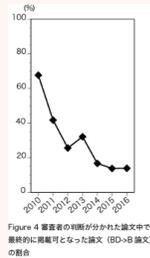
2008年導入審査システム

- 審査結果を「掲載可」と「掲載不可」の2種類とし、「再審査」の区分をなくす。
- 投稿と編集を電子化する。ウェブ投稿を進め、審査を電子化することで、編集作業がスピーディーに行われるようにする。
- 常任編集委員と編集委員の区分をやめ、発達心理学研究編集委員会（編集委員会）に一本化する。
- 論文の審査は、編集委員1名（担当編集委員）と一般審査者2名の計3名でおこなうこととし、一般審査者は、会員から選出する。
- 論文が投稿されてきたら、編集委員長と副委員長が担当編集委員を決め、さらに審査者を決定する。
- 審査結果の判断および編集作業は、基本的に担当編集委員の責任で随時進める。

採択率の変動

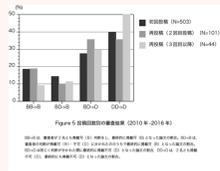


判断が割れた場合の結果



- 論文の採択率（掲載可とされた論文の割合）は、新システム導入直後の48.7%（2010年）から、17.8%（2016年）に大きく減少
- 判断が分かれた場合、新システム導入直後は**67.6%**が掲載可と判断されたものが、2016年は**13.9%**となっており、激減

再投稿論文の特徴



- 改稿によって採択される割合が高くなるということはないが、その逆に、いったん不採択となった論文が、再投稿後も不採択になりやすいわけではない。

結論

- 「良い点を積極的に評価する」インパクト重視よりも、「欠点の積み重ねで評価」しがちである、旧システム下の審査と変わらない状況。
- 採択率の低さが投稿への意欲を減じている可能性

編集委員長経験者への聞き取りから

2012年以降の外山紀子氏・柴山真琴氏・浜谷直人氏・別府哲氏・竹下秀子氏への聞き取り

- 1回の審査で結論を出さなくてはならない新システムでは、論文の問題点が修正可能かどうかを確認しなくてもそれができず、インパクトを重視するよりも、事実関係の上で誤りのある論文が掲載されるリスクを避けるため、不採択に判断が傾くことになったように思われる。
- 担当編集委員の役割も、執筆者と共に一定の時間をかけて論文の質を高めるための伴走者というよりも、**判断が分かれたときに機械的に結論を出す判定者**でしかなくなってしまっている。それは執筆者の側にも言えることであり、コメントの内容が生産的なものかどうかという点よりも、審査結果のみに注意が向きがちである。審査結果に対する異議申立も増えており、その多くが、判断が分かれた場合に不採択となったことへの異議である。
- インパクト中心主義のもとで担当の編集委員に期待される役割は、投稿されてきた段階で多少の瑕疵があっても、その論文のもつインパクトを積極的に評価し、担当者の責任で採択・掲載までつき合うことである。編集委員の任期は2年、編集委員長の任期が1年で、いずれも任期が短く、それにふさわしい体制になっていない。
- 論文のインパクトだけでなく、雑誌としてのインパクトを高める努力、工夫も必要である。そのために、理事会は編集委員会と密接に連携をとり、バックアップする体制を作るべき。

理事会への提言

編集委員会の体制の強化

編集委員長、編集委員の任期・再任の可能性の検討／対面での編集委員会の開催／理事会の責任による編集委員の選定・選任

インパクトの重視と迅速な判断のバランスが取れた審査手続き

- 初回審査時のみ「修正再審査」を認める。ただし、「修正再審査」は、方法、データの提示方法等、事実関係を確認する場合に限る（すなわち、インパクト判断をする上で、必要な修正を要求することに限定する）。
- 再投稿については、編集委員会で改稿の確認を行うこと、回数の制限をルール化する。

インパクト中心主義の徹底

インパクト中心主義の再確認／無欠点主義の克服／規律に欠けた論文投稿への注意

雑誌としてのインパクトを高めるために

特集の企画、大会企画との連動など、理事会の積極的な関与を行う

2008年改革の背景と経緯、 廃案となった「編集規則(岩立私案)」

岩立志津夫
(日本女子大学)

話の要点

- 「価値ある研究」が多数掲載され、それらが連鎖反応する、これが学会誌の理想だ。しかし、これは難しい。価値ある研究も多様で、時代によって変化する。発達心理学研究も同様だ。
- ではどうするか、ここでは、その議論のために、次の点を述べる。
 - 2008年改革の背景
 - 東洋『発刊にあたって』
 - 氏家達夫『恐れず書こう、恐れず採択しよう、そして恐れず批判しよう』
 - 2008年改革
 - 氏家達夫『巻頭言 発達心理学研究の審査を迅速化し、無欠点主義からインパクト中心主義へと変わります』
 - 2017年度発足の編集WGの課題と廃案となった改革案「編集規則(岩立私案)」
 - 編集委員会『問題提起』
 - 岩立志津夫『発達心理学研究編集委員会編集規則(岩立私案)』

発刊にあたって 東洋

- 比較的最近まで、不完全燃焼の時代が続いたように思う。どうも血湧き肉躍る躍動感に乏しい分野になった。
- 新しい渦を巻いて沸騰しはじめている。キーワードは、生涯性格、科学性、そして学際性である。
- 量的のみならず質的にも新しい発展をしようとし、その機運が若い研究者たちを引きつけ、熱気ある研究環境を作り出している。
- 学会活動の大黒柱は研究誌である。世界および新しい時代の学界にアピールするものを持った研究誌として、われわれの共有のフォーラムとして、意欲的な研究者の発表のホームグラウンドとして、育てていきたい。

初期の発達心理学研究に求められていたもの

- 発達心理学研究の研究拠点
- 新しい発想と自由な議論
 - 意見論文
- 新しい研究分野
 - 事例研究
 - 質的研究
 - 応用研究(発達臨床)

発達心理学研究が抱えていた難問

- 査読結果がでるのが遅い
- 子細にわたる、長文の査読結果
- 二重投稿問題

恐れず書こう、恐れず採択しよう、そして恐れず批判しよう 氏家達夫

- 機関誌の編集という視点から見れば、活発だとはとてもいえない。
- 機関誌の利用を活発にする方策
 - 審査は基本的に○か×。×は、論理性が欠けていたり、事実誤認がある場合に限られる自分の立場から論文を批判してはいけないべき。
 - ある論文に新しい視点が含まれているとしたら、多くの場合、(どうしても)、未消化で不完全な部分も含まれているものだ。
 - 論文を書くのに、気兼ねはいらない。自分のしたかったことと実際にしたことをしっかり関係づけて書きさえすれば。実際にわかったことにもとづいている限り、思いきった仮説を掲げて構わないのだ。
 - 最後に、読者に一言。恐れず批判しよう。編集委員会にどしどし意見や批判を寄せよう。投稿者にも、意見や批判を送りつけよう。そして、もしある論文に少しでも影響されたら、ぜひそれを批判する研究やそれを発展させる研究をしてみよう。そして、それをもって恐れず書いてほしい。そうすれば、編集委員会も恐れず採択することができるだろう。

編集委員会からの問題提議

1. インパクト主義の継続可否
2. 再投稿の回数制限、再投稿の条件
3. 査読者数増加の負担
4. 規定の変更の可能性、規定の変更をどのレベル(社員総会、理事会、編集委員会のどのレベルとするか)

編集委員会編集規則の主な変更点 (岩立私案)

1. 特集号の編集に、理事会が深く関与するようにする。
2. 審査区分を「掲載可」(実際はAとBがある)と「掲載不可」の2区分から、「A採択」「B修正採択」「C修正再審査」「D不採択」の4区分に変更し、それぞれの区分の意味と審査結果決定後の手続きを明確にする。
3. 「D不採択」となった論文の再投稿は認めないが、「C修正再審査」を新設することで、「D不採択」になりやすい査読傾向を是正する。
4. 修正の回数制限を設けて、効率のよい査読が進むようにする。
5. 歴代の編集委員長はインパクト主義の徹底に積極的だったが、編集規則が余りにシンプルすぎたため、また「編集委員会通信」などでの議論も進まなかったため、当初の理念がうまくバトンタッチされず、また熟成もされずに来た。その結果、歴代委員長や編集委員は難しい状況での対応が必要だったと推測される。そこで、岩立私案では審査基準を具体的に示す工夫をした。ただし、今回の審査基準は確定したものではなく、3月の社員総会までに、理事会及び社員、編集委員会、会員に開示して、改善を進めることになる。

審査区分

- 審査結果の区分は、「A採択」、「B 修正採択」、「C 修正再審査」、「D 不採択」とする。
 - 「A採択」とは、そのままあるいは字句などのわずかな修正を加えることで、本誌の掲載基準を満たすと判断されたことを意味する。
 - 「B 修正採択」とは、本誌の掲載基準を満たすには実質的な修正が必要と判断されたことを意味する。
 - 「C 修正再審査」とは、論文の正しい評価をするために必要な情報が不足しているため事実関係を確認する必要があると判断されたことを意味する。
 - 「D 不採択」とは、本誌の趣旨に合わないものや掲載基準を満たさないと判断されたことを意味する。同じ内容の論文の再投稿はできない。

審査基準

審査基準の基本は、発達心理学および発達心理学研究の発展への新たな貢献であり、審査にあたっては、次の各項目に留意し、基本的によいところ（インパクト）を積極的に評価する。

1. 社会貢献を目指して、日本及び世界の発達に関する、確実なデータの広範な蓄積に寄与する。
2. 種類としては、量的及び質的データに基づく論文、発達のメカニズムや解釈などに関する理論的論文、データに基づく実証的論文がある。
3. 研究方法としては、実験、観察、質問紙、面接、文献など、心理学の多様な研究手法があり、それぞれの方法には様々な面と長所・短所があることに十分留意する。
4. 審査結果の決定においては、欠点の加算による評価ではなく、よいところを重視した評価を行う。審査時点で論文の欠点とみなされるものであっても、加筆・訂正による修正が見込まれるもの（たとえば先行研究のレビューや構成の弱さなど）であれば、そうした欠点の累積を理由とした不可判断は行わない。
5. 研究の将来的な発展が見込まれる萌芽的な研究を積極的に評価し、修正の結果欠点や不足を補う見込みがあれば掲載に向けてチャンスを与える。ただし、最終的な掲載に際しては、科学的論文としての基本的な基準(客観性を備えた問題設定、適切な分析、秩序立った解釈)を満たす必要がある。
6. 査読にあたっては、研究の豊かで多様な発展のためには、研究の価値や研究理論は時代とともに変化し、評価の変更が生じることがあることを理解し、時には寛容な査読が必要という視点に立つ。査読の最終的な判断に迷った場合には、論文の長所・短所を開示した上で公刊し、学会員やその後の研究に判断を委ねる場合もある。
7. 査読に際しては、平等で公平な関係に依拠する研究者の相互査読（ピアレビュー）である点を常に意識し、常に投稿者の論文執筆の努力に敬意を持つようにする。

現行の審査システムに対する 会員の評価

中部大学 伊藤大幸

調査の概要

調査の概要

◆ 目的

- 2008年度より導入された現行の審査システムに対する会員の所感や見解を明らかにし、本企画における議論の論点を整理する
- 編集委員会における議論の資料としても有効活用する

◆ 調査対象

- 日本発達心理学会の正会員、学生会員

調査の概要

◆ 調査方法

- Googleフォームを使用して実施
- 無記名での回答（個人を特定しうる情報は避けるよう教示）

◆ 調査期間

- 2021年2月1日（月）～2月19日（金）

◆ 調査項目数

- 54項目

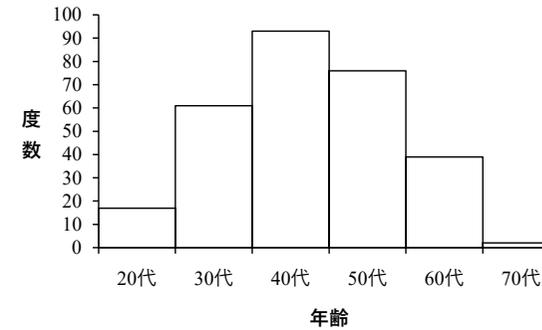
◆ 回答者数

- 288名（対象者4023名：回答率7.2%）

回答者の属性

回答者の属性

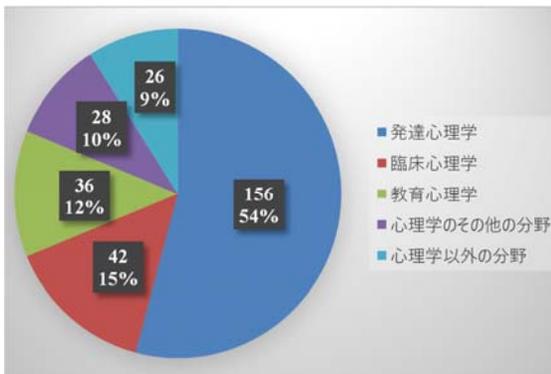
◆ 年齢



- 40～50代を中心に、20～70代まで幅広い年代の会員（計288名）が回答

回答者の属性

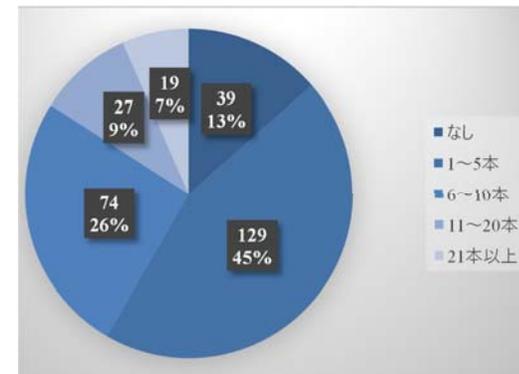
◆ 主たる専門分野



- 発達心理学を主専門とする回答者が約半数を占めた
- 発達心理学以外では、臨床心理学や教育心理学を主専門とする回答者が多かった

回答者の属性

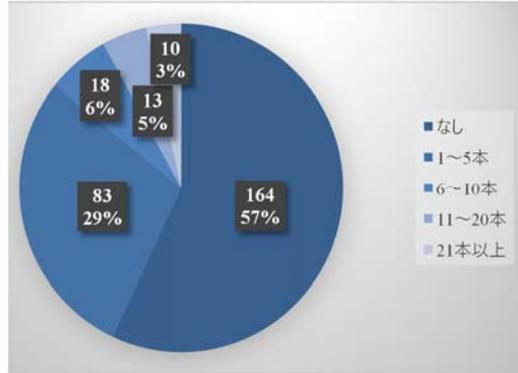
◆ 国内誌（査読つき）の掲載論文数



- 「1～5本」が最も多かった
- 11本以上の掲載論文を持つ回答者も46名（16%）

回答者の属性

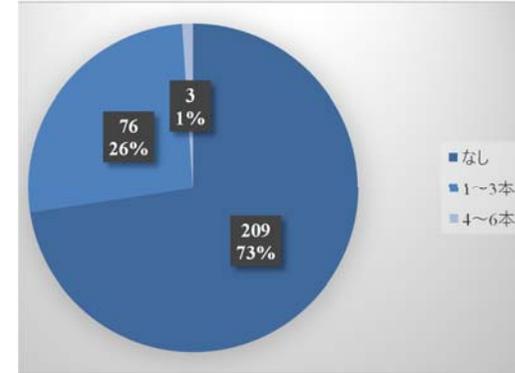
◆ 国際誌（査読つき）の掲載論文数



- 「なし」が半数以上を占めた
- ・11本以上の掲載論文を持つ回答者も23名（8%）

回答者の属性

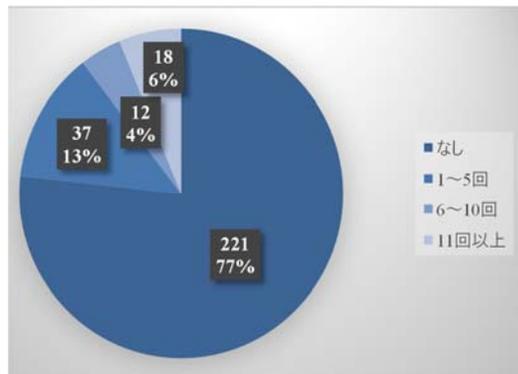
◆ 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の掲載論文数



- 現行審査システムでの掲載論文を持つ回答者は79名（27%）

回答者の属性

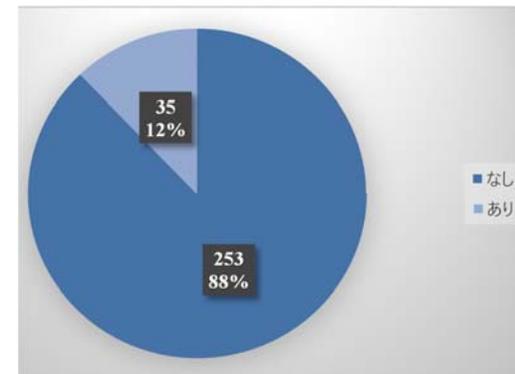
◆ 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の査読担当回数



- 現行審査システムで査読経験のある回答者は67名（23%）

回答者の属性

◆ 現行審査システムにおける「発達心理学研究」の編集委員経験



- 現行審査システムで編集委員経験のある回答者は35名（12%）

本誌の査読に関する認識

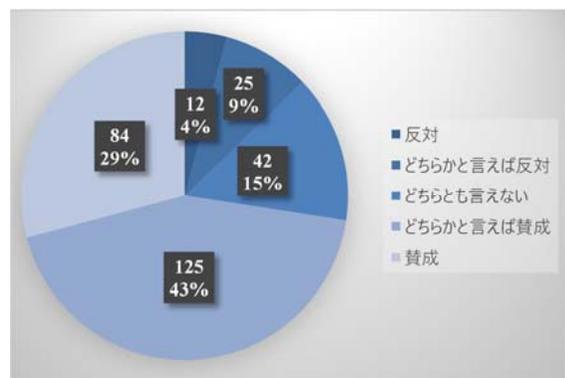
本誌の査読に対する認識

- ◆ 現行の審査システムについて、以下の説明を提示した上で質問に回答を求めた

「発達心理学研究」では2008年度より現行の審査システムが導入されました。それ以前の旧システムでは、多くの投稿論文に「修正再審査」の判定が繰り返され、結果的に、インパクトのある論文よりも不備の少ない論文が採択される「無欠点主義」に陥りやすい状況がありました。こうした状況を変えるため、「インパクト中心主義」に基づく現行の審査システムが導入されました。旧システムからの主要な変更点は以下の2点です。

- (1) 論文の欠点の少なさよりも、論文の持つインパクト（その論文がもつ、アイデアや方法、結果の重要性、新しさ、おもしろさ、その論文の試みの今後の発展可能性や新たな研究や議論を喚起する可能性）を積極的に評価する。
- (2) 「修正再審査」を廃止し、初回の審査から「掲載可（条件付採択含む）」または「掲載不可」の判定を行う。ただし、「掲載不可」になった場合も、修正を加えた上での再投稿は積極的に受け入れる。

インパクト中心主義への賛否



- 「賛成」または「どちらかと言えば賛成」が72%
 - 「反対」または「どちらかと言えば反対」が13%
- インパクト中心主義そのものには賛成の考えを持つ回答者が大勢を占めた

質問：上記(1)の方針（欠点の少なさよりもインパクトを評価する）について、どのように考えますか？（方針に沿った審査が行われているかどうかではなく、方針そのものに対する賛否をお答えください）

インパクト中心主義への賛否

- ◆ 賛成の理由

- ・ 学問の発展や社会貢献につながりやすいため：79件
- ・ 学会としての独自性を明確にするため：14件
- ・ 無欠点主義よりも審査がスピーディになるため：9件

- ◆ 反対の理由

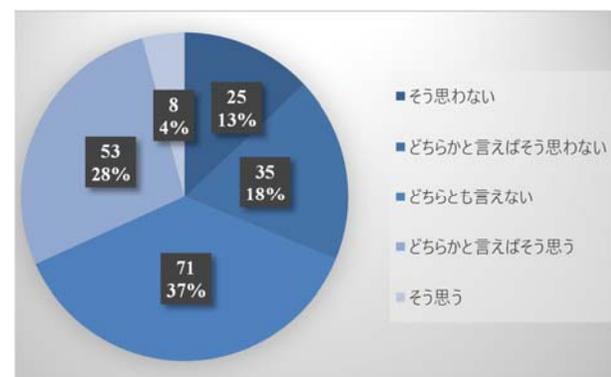
- ・ 審査者によってインパクトの評価基準が異なるため：14件
- ・ 研究のクオリティが軽視される可能性があるため：13件
- ・ 再現性が見直されている国際的な流れと逆行するため：4件

インパクト中心主義への賛否

◆ 考察

- 会員の多くはインパクト中心主義を好意的に捉えており、学会のスタンスや特色を示す意味でもインパクト中心主義という独自性の高い理念を掲げることは意義がある
- しかし、インパクトという多義的な概念をどう捉えるかについては議論の余地がある
 - ✓ 世界的には科学研究の再現性問題が大きく取り沙汰されており、新規性や独創性に偏った審査の仕組みに異が唱えられている
 - ✓ 一方では「エビデンスに基づく実践」の理念が広がっており、実践につながる研究が求められている

インパクト中心主義の履行



- 「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が32%
 - 「そう思わない」または「どちらかと言えばそう思わない」が31%
- 方針に沿った審査が行われていると考える回答者と行われていないと考える回答者の割合が拮抗した

質問：現在の「発達心理学研究」では、上記（1）の方針（欠点の少なさよりもインパクトを評価する）に沿った審査が行われていると思いますか？

インパクト中心主義の履行

◆ 方針に沿った審査が行われていると思う理由

- インパクトのある論文が掲載されているため：17件
- インパクトを重視した査読が行われていると感じたため：9件

◆ 方針に沿った審査が行われていないと思う理由

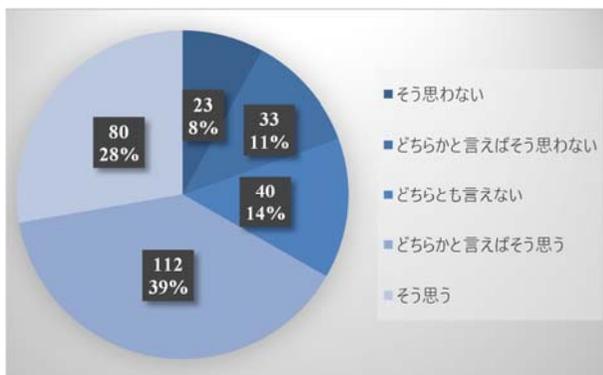
- インパクトよりも欠点を重視した査読が行われていると感じたため：17件
- インパクトの概念が曖昧で審査者によって評価基準が異なるため：15件
- インパクトのある論文があまり掲載されていないため：10件

インパクト中心主義の履行

◆ 考察

- インパクト中心主義そのものには賛成の会員が多い一方で、その理念が実際に履行されているかについては否定的な考えを持つ会員が多い
- 方針に沿わない審査が行われたという意見やインパクトの評価基準が審査者によって異なるという意見が多く見られた
- インパクトの評価基準について、編集委員会、審査者、投稿者の間で一定の共通理解を形成する必要性が改めて示唆された

インパクトの定義の必要性



■ 「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が67%

■ 「そう思わない」または「どちらかと言えばそう思わない」が19%

→インパクトについてより具体的な定義が必要だと考える回答者が多数を占めた

質問：上記（1）の方針の「インパクト」について、より具体的な定義が必要だと思いますか？

インパクトの定義の必要性

◆ より具体的な定義が必要だと思う理由

- ・ 審査者による評価基準のブレや主観性を減らすため：45件
- ・ 投稿者が研究や投稿を行う際の指針となるため：18件
- ・ 研究のクオリティや再現性がインパクトの概念に含まれることを明確化するため：5件
- ・ 審査者にとって定義が明確な方が審査しやすいため：4件

◆ より具体的な定義が必要でないと思う理由

- ・ 研究の多様性を制限する可能性があるため：23件
- ・ 明確な定義は難しいと考えられるため：13件

インパクトの定義の必要性

◆ 考察

- ・ 多くの会員がインパクトの概念の明確化を求めていることが確認された
- ・ 審査の客観性・公平性を高めるという審査上のメリットはもとより、あらかじめ評価基準が明確化されることで研究や論文作成がしやすくなるという投稿者側へのメリットも大きい
- ・ 一方で、定義が過度に厳格であったり、一面的であったりすれば、多様な研究の発展や柔軟な審査が阻害される危険性も
- ・ 研究のインパクトにはどのような側面があるのか明らかにし、「ほどよい厳格さ」の定義を定める必要がある

インパクトの評価基準

◆ 項目

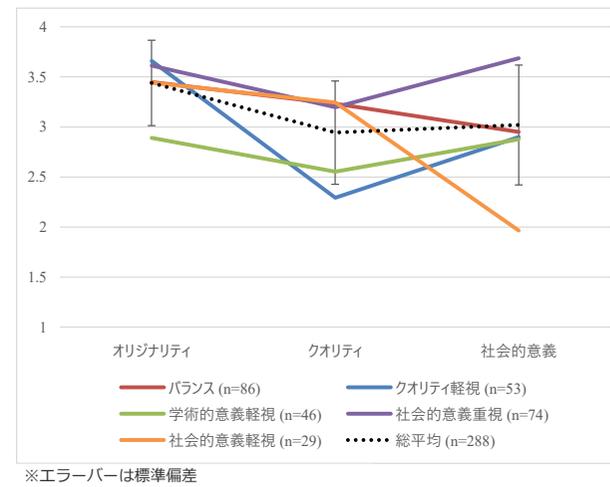
- ・ 研究のインパクト（research impact）に関するレビュー（Greenhalgh et al., 2016; Penfield et al., 2014）や国内外の学術誌の審査方針を参考に28項目を独自に作成
- ・ 「重要でない」（1）、「あまり重要でない」（2）、「やや重要」（3）、「重要」（4）の4件法で回答を求めた

◆ 分析

- ・ 最尤法（プロマックス回転）による因子分析を実施
- ・ スクリープロット、平行MAP分析、解釈可能性に基づき、3因子解を採用
- ・ いずれの因子にも.40以上の負荷を示さなかった8項目を除外

項目	因子負荷量			M	SD
	因子1	因子2	因子3		
クオリティ (ω=.834)				2.94	0.52
科学研究としての完成度の高さ	.749	.028	-.077	2.77	0.80
研究の理論的基盤	.652	-.070	.050	3.11	0.76
研究方法上の欠陥のなさ	.652	.090	-.287	2.63	0.83
先行研究を踏まえた問題設定	.641	-.075	.003	3.04	0.77
結果の再現可能性	.561	.127	-.183	2.81	0.81
洗練された研究方法 (デザイン、測定、解析など)	.550	-.134	.242	2.91	0.80
論理展開の明快さや説得力	.530	.029	.077	3.15	0.76
科学的な知識体系の構築への寄与	.506	.033	.307	3.13	0.67
社会的意義 (ω=.836)				3.02	0.60
社会的課題の解決への貢献	.038	.766	.089	3.12	0.77
実践 (臨床、教育、子育て支援など) への応用可能性	-.097	.746	-.022	3.05	0.83
社会的ニーズに即した問題設定	.048	.678	-.047	3.02	0.85
政策上の議論への貢献	-.022	.647	-.084	2.54	0.84
研究課題の社会的重要性	.022	.604	.012	3.40	0.76
実践者 (臨床家、教師など) にもたらす示唆やインスピレーション	.009	.593	.105	2.98	0.81
オリジナリティ (ω=.748)				3.44	0.43
研究方法の斬新さ・ユニークさ	.055	-.078	.620	3.27	0.75
研究領域に変革をもたらす可能性	.023	.181	.612	3.28	0.70
新たな研究や議論を喚起する可能性	-.037	.158	.550	3.48	0.64
知見の新規性	-.068	.058	.547	3.39	0.65
アイデアや着眼点のおもしろさ	-.080	-.095	.544	3.69	0.51
研究課題のオリジナリティ	.111	-.100	.498	3.52	0.62
	因子間相関				
	因子2	.108			
	因子3	.030	.182		

- 項目内容に基づき、各因子を「クオリティ」、「社会的意義」、「オリジナリティ」と命名
- 因子間相関は.03~.18と低く、相互に独立性が高い
- 尺度得点 (項目平均) の平均値は「オリジナリティ」が他2尺度よりも1SD程度高いが、他の2尺度の平均値も4件法で3前後の値を示した



- 上記3つの尺度得点を使用し、Ward法・ユークリッド平方距離による階層的クラスター分析を実施
- デンドログラム (下図上部) に基づき5クラスターを採用
- 研究者が持つインパクトの評価基準は多様なパターンに分かれることが確認された

インパクトの評価基準

◆ 考察

- インパクトの評価基準には、少なくともオリジナリティ、クオリティ、社会的意義という3つの要素が含まれる
- 全ての研究者が3つの観点を等しく重要視しているのではなく、研究者によって重視する観点が大きく異なる
 - ✓ こうした評価の重みづけの違いが、審査者と投稿者の間で生じた場合、「インパクト主義が履行されていない」という認識をもたらす
 - ✓ この重みづけの違いが複数の審査者の間で生じた場合、審査の主観性やブレといった認識をもたらす
 - ✓ いずれの認識も、本誌の審査に対する不信感につながり、投稿の意欲を減退させる原因となりうる

インパクトの評価基準

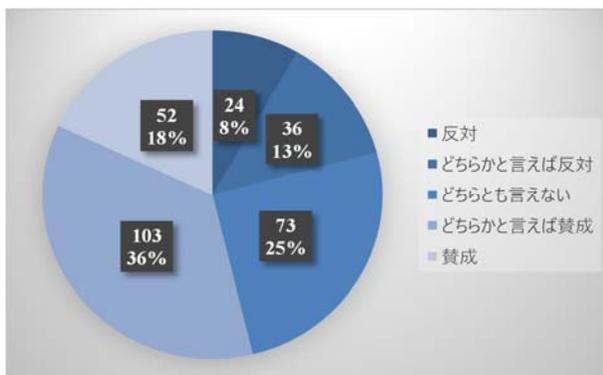
◆ 考察 (つづき)

- インパクト中心主義と3要素による評価 (特にクオリティの評価) は両立しうるか?

インパクト

	オリジナリティ	クオリティ	社会的意義
研究の固有な性質 (修正困難な問題)	・着眼点のおもしろさ ・研究方法の独自性 ・研究結果の新規性	・研究デザイン ・測定方法 ・データの質・量	・実践への示唆 ・政策への示唆
場合によっては修正可能な問題	・先行研究のレビュー	・理論的基盤 ・分析方法	
論文の表面的な性質 (修正可能な問題)	・書き方・見せ方	・書き方・見せ方	・書き方・見せ方

修正再審査の廃止への賛否



■ 「賛成」または「どちらかと言えば賛成」が54%

■ 「反対」または「どちらかと言えば反対」が21%

→修正再審査の廃止に賛成する回答者が約半数を占めたが、反対意見も少なくない

質問：上記（2）の方針（修正再審査の廃止と再投稿の積極的な受け入れ）について、どう考えますか？

修正再審査の廃止への賛否

◆ 賛成の理由

- ・ 審査の迅速化が可能になるため：23件
- ・ 投稿者自身の視点で研究を見直しやすいため：10件
- ・ 意欲が維持・向上しやすいため：10件

◆ 反対の理由

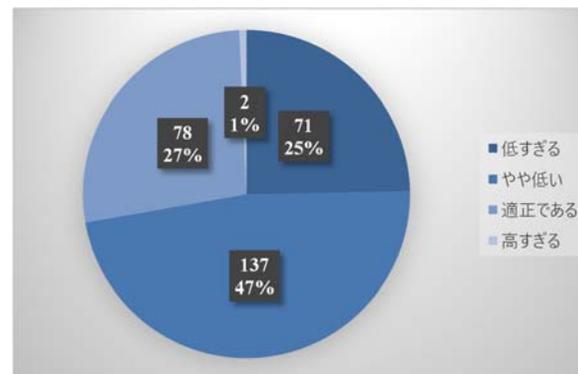
- ・ 修正再審査による論文の改良の機会がなくなるため：13件
- ・ 審査者にとって一度の審査で採否を決定するのは難しいため：9件
- ・ 投稿者の意欲が低下しやすいため：8件
- ・ 再投稿で審査者が変わり審査の連続性が保たれないため：7件
- ・ 判断が不採択に偏りやすいため：3件
- ・ 反論の機会が与えられないため：2件

修正再審査の廃止への賛否

◆ 考察

- ・ 審査の迅速化をもたらす修正再審査の廃止を好意的に受け止めている会員が多い
- ・ 一方、修正再審査の廃止に反対の回答者の多くは、修正再審査を論文の改良やトレーニングの貴重な機会と捉えている
 - ✓ 一度で採否を決定するため判断が保守的な方向に偏りやすいこと、再投稿のたびに審査者が変わり審査の一貫性が保たれないこと、審査者の選び直しや修正箇所の確認（修正対照表がないため）をするための編集委員会の負担も大きいこと、誤った指摘への反論の機会が著者に与えられないことは、いずれも制度上の重大な問題であり、改善の方策を議論する必要がある

採択率の水準への印象



■ 「適正である」が27%

■ 「低すぎる」または「やや低い」が72%

■ 「高すぎる」が1%

→現在の採択率の水準が低いと考える回答者が大勢を占めた

質問：「発達心理学研究」に投稿された論文の採択率（最終的に採択に至った論文の割合）は、旧システムでの平均が43%であったのに対し、現行システムでは導入直後の49%から年々低下し、2015年以降には20%前後で推移しています。この20%前後という近年の採択率の水準について、どう考えますか？

採択率の水準への印象

◆ 適正であると考えられる理由

- ・ 投稿数や投稿論文の質が影響している可能性があるため：19件
- ・ 採択率の数値だけでは判断できない：12件
- ・ 掲載論文の質を保つには適正な水準と考えられるため：9件

◆ 低いと考える理由

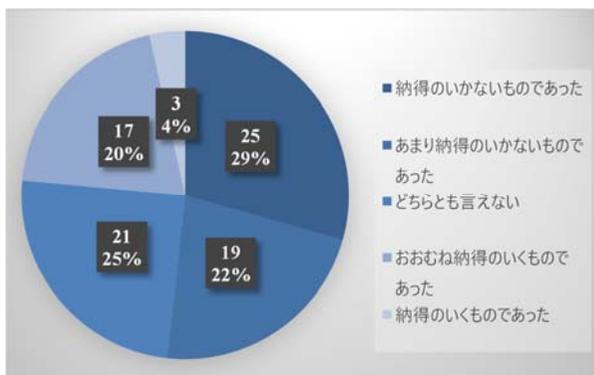
- ・ 意欲の低下や投稿数の減少につながるため：20件
- ・ インパクトではなく欠点で評価していると考えられるため：13件
- ・ 投稿者と審査者の間でイメージのズレがあるため：5件
- ・ 国内の他の雑誌に比べて低いため：4件

採択率の水準への印象

◆ 考察

- ・ 回答者の多くは国内誌の採択率として2割という水準は低いという印象を示した
- ・ 修正再審査がない現在のシステムでは、初回の審査で掲載可の判定をする際に、十分な改稿が見込める可能性について、ある種の「賭け」を余儀なくされる
 - ✓ こうした「賭け」を避けるために、採否の判定が保守的な方向（掲載不可）に傾きやすいという側面は無視できない
 - ✓ 2名の審査者で判定が掲載可と掲載不可に分かれた場合に編集委員会が掲載可の判定を行う割合は、現行システム導入直後の2010年は7割程度であったのが年々低下し、2014年以降は2割程度にまで低下

掲載不可判定への印象



- 「納得のいくものであった」または「おおむね納得のいくものであった」が24%
- 「納得のいくものであった」または「あまり納得のいくものであった」が52%
→審査結果に不満を持つ回答者が半数にのぼった

質問：現行の審査システムで「掲載不可」の判定を受けたことはありますか？ある場合、その審査結果は納得のいくものでしたか？

掲載不可判定への印象

◆ 納得のいくものであった理由

- ・ コメントの内容が的確であったため：11件
- ・ 最終的に採択に至ったため：3件

◆ 納得のいくものでなかった理由

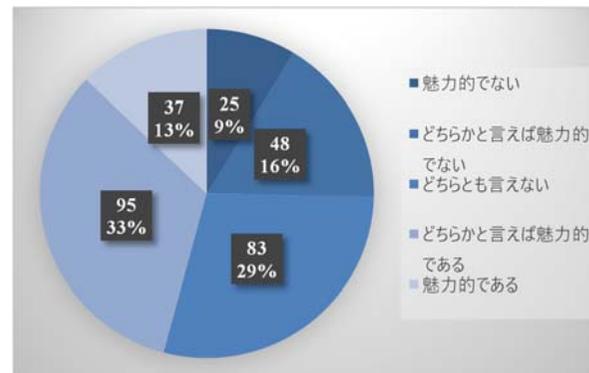
- ・ インパクトより欠点に基づく判断であったため：11件
- ・ 審査者の学問的立場や主観に基づく評価であったため：5件
- ・ 再投稿によって審査者が変わり、評価の連続性が保たれないため：4件
- ・ 掲載不可となった場合に釈明や反論の余地がないため：2件
- ・ 分量制限に対する配慮が不足していたため：2件

掲載不可判定への印象

◆ 考察

- 掲載不可の判定に不満を持つ回答者が約半数にのぼり、その多くが審査コメントへの疑問を理由に挙げた
 - これらの疑問の多くは、審査者や投稿者の中でインパクト中心主義に対する認識にバラつきが大きいことに起因すると考えられる
 - 評価基準について共通認識を形成することが必要
- 再投稿のたびに審査者が変わることや誤った指摘への反論の機会がないことについては改善策の議論が求められる
- 分量制限についても、研究の多様性に配慮した仕組みを議論する必要がある

本誌の魅力



- 「魅力的である」または「どちらかと言えば魅力的である」が46%
 - 「魅力的でない」または「どちらかと言えば魅力的でない」が25%
- 本誌を魅力的であると考える回答者が比較的多かった

質問：総合的に見て、現在の「発達心理学研究」は論文の投稿先として、魅力的だと思いますか？

本誌の魅力

◆ 魅力的であると考える理由

- 国内で発達心理学を代表する学会の雑誌であるため：21件
- 査読の質が高いと感じられるため：13件
- 魅力的な論文が多く掲載されているため：11件
- 修正再審査がなく審査が速いため：8件

◆ 魅力的でないと考える理由

- 採択率が低く、ハードルが高いため：18件
- 査読の質が低いと感じられるため：13件
- 必ずしも魅力的な論文が多く掲載されていないため：10件
- 和文誌であるため：9件
- 修正再審査がないため：6件

本誌の魅力

◆ 考察

- 国内における本誌のプレゼンスを評価する回答が多く見られた一方で、和文誌であるために投稿先の選択肢に入らないという回答も少なくなかった
 - 研究成果を国際的に発信することが求められる中で、和文誌である本誌が今後どのような役割を果たしていくべきなのか議論が必要
- 査読の質、掲載論文の質、修正再審査がない審査システム、掲載される論文の間口の広さなどについては、肯定的な回答と否定的な回答がほぼ同数ずつ見られ、認識に個人差があることが示唆された

魅力を高めるための提案

- ◆ 「発達心理学研究」をより魅力的な雑誌とするための提案があればご記入ください
 - 論文の審査基準を明確化し、編集委員や審査者への周知を徹底する：15件
 - 実践報告、資料、ショートレポートなど論文種別を増やす：14件
 - 社会的・実践的な意義のある論文をより多く受け入れる：7件
 - 英語論文を受け入れる、または、英文誌を新たに作る：7件

魅力を高めるための提案

- 依頼論文、コメント、コラム、エディトリアルなど、多様な内容を掲載する：5件
- 審査者や編集委員の選定方法を改善する：4件
- 修正再審査を復活する：4件
- アンケートや議論を継続して実施する：3件
- 分量制限をなくす：2件

魅力を高めるための提案

- ◆ 考察
 - 多くの会員が審査基準の明確化と周知を望んでいることが再確認された
 - 論文種別を細分化し、それぞれについて異なる評価基準を設定することは、研究の多様性を保証する有効な方策の一つ
 - ✓ オリジナリティを追求した探索的研究、クオリティを追求した検証的研究、社会的意義を追求した実践的研究など、多様な研究のスタイルを保証することが学問領域の発展に寄与すると考えられる

魅力を高めるための提案

- 掲載論文の多様化を図る上では、一律の分量制限を撤廃し、それぞれの論文の内容に応じて分量の適切性を個別に評価する仕組みを導入することも議論の必要がある
- 和文誌としての特色を議論するとともに、英文誌の発行についても本格的な議論が必要な時期に
 - ✓ 英語で論文を書く会員の数は増加しており、英語論文の審査・編集を担当できる人材を確保することも容易になってきている
- 審査論文の領域の専門家がデータベースに登録されていないことがままある
 - ✓ データベースの抜本的な拡充を図るか、データベースを廃止し、全会員から審査者を選定する方式に変更するなどの方策について議論が必要

論点（+たたき台）

論点

1. インパクトの評価基準をより明確化すべきか否か、明確化するとすればどのように定めるか

- 多くの会員は評価基準の明確化を望んでおり、審査の客観性や信頼性を高める上でもある程度の明確化は必要か

	オリジナリティ	クオリティ	社会的意義
研究の固有な性質 (修正困難な問題)	・着眼点のおもしろさ ・研究方法の独自性 ・研究結果の新規性	・研究デザイン ・測定方法 ・データの質・量	・実践への示唆 ・政策への示唆
場合によっては修正可能な問題	・先行研究のレビュー	・理論的基盤 ・分析方法	
論文の表面的な性質 (修正可能な問題)	・書き方・見せ方	・書き方・見せ方	・書き方・見せ方

インパクト

論点

2. 論文種別を細分化すべきか否か、細分化するとすればどのように分けるか、種別間の序列を設けるか

- 論文種別を細分化することで、多様なスタイルの研究を受け入れ、学問領域の活性化と発展を図ることが可能に
- オリジナリティを追求した探索的研究（レター・速報）、クオリティを追求した検証的研究（資料）、社会的意義を追求した実践的研究などが想定される
- あるいは、全ての要素を一定以上の水準で兼ね備えた論文を原著とし、その下位に上記の3種を位置づけるか

論点

3. 修正再審査を復活すべきか否か、復活するとすればどのような形式を取るか

- 修正再審査の廃止は多くの会員が支持しており、従来のような形式の修正再審査を復活することは望ましくない
- 一方、初回の審査で採否を判定することの難しさから保守的な判定バイアスが生じている現状や、掲載不可となった場合に投稿者に釈明や反論の余地が与えられない問題を考慮すれば、回数を一回に限定した形で修正再審査を復活することは必要であるように思われる

論点

4. 論文の分量制限を廃止すべきか否か

- シンプルな仮説検証型研究であれば規定の10ページより大幅に少ないページ数、テキストの分析をともなう質的研究や複雑な統計解析を必要とする縦断研究であれば10ページを大きく超えるページ数になることもありうる
- 多様な論文を受け入れ、研究の活性化を図るには、一律の分量制限は行わず、個々の論文の内容に応じて個別に分量の適切性を評価することが望ましいと考えられる

論点

5. 審査者や編集委員の選定の仕組みを見直すべきか否か、見直すとすればどのような方法を取るか

- 審査者データベースの事前登録は、審査依頼へのレスポンスを高める効果は持っているように思われるが、含まれる会員数が少ないことに課題がある
- 全ての会員に一斉に登録を依頼し、査読つき論文の掲載数や研究費の獲得状況などを入力していただき、その情報をもとに審査者や編集委員の選定を行うといった方法は一案として考えられる

論点

6. 英文誌の発行を行うべきか、行うことは可能か

- 研究成果の国際的な発信がますます求められるようになっていく情勢を踏まえれば、日本を代表する発達心理学の学会として、早かれ遅かれ英文誌の発行は必要になると考えられる
- 英語での審査・編集を担当できる人材は以前よりも増えていると思われるが、まずは実態の把握が必要である

論点

7. 本誌は和文誌としてどのような役割を果たすべきか

- 松沢（2005）が日本語で論文を書く意義として挙げた4点
 1. 初心者の練習になる
 2. 国内の研究者に知ってもらえる
 3. 総説が日本語読者にとって有用である
 4. 会員間の意見交換に適している